(様式10)

<u> </u>	2 年度	■ 当初う	▶算 □	補正予算	. (月)	記入日	令和	2年 6月	23日
機関名	農業試験	場		課題コー	·ド H3103	303	事業年度	R 1	年度 ~ R	₹5 年度
課題名			野芽	束の競争力	強化を目	目指した	:新栽培技	術の開発		
機関長名		金	和裕		担当(班)名		野詞	某担当	
連絡先		018-8	381-3316		担当	者名		本原	主求	
政策コード	3	政	策 名	新時代を服	券ち抜く3	女めの農	林水産戦略	ξ.		
施策コード	2	施	策 名	複合型生產	産構造への	の転換の	加速化			
指標コード	1	施策の	の方向性	大規模園	芸拠点を植	亥とした	戦略作物σ)更なる生涯	産拡大	
	重点(事功	頁名) 野郭	菜・花きσ)省力高品:	質安定生產	産技術の	開発		基盤	
種 別	研究		開発	0	試験		調査		その他	
	県単	0	国補	·	共同		受託		その他	
			評 価	対 多	課	題 <i>の</i>) 内 :	交		

1 研究の目的・概要

"オール秋田 "で取り組んでいる戦略野菜等の生産振興と、メガ団地等の大規模経営体や家族経営体の経営安定 に向けて、高能率な機械開発、安定生産・省力化技術の開発を行う。

- 1)特に、エダマメ、ネギについては施策目標である「日本一」の達成を支える新栽培技術を開発する。エダマメでは、大規模化に向けた生産技術の開発に取り組み、収穫脱莢作業を高能率化・高精度化できるエダマメ収穫機を開発し、長期連続出荷栽培体系を確立する。ネギでは連作と生育の関係を解明し長期的な作付け計画の指針を策定する。
- 2)アスパラガスでは、ハウスを利用した半促成栽培技術を確立する。トマトでは、収量と品質が低下する高温期 (8月~9月)の安定栽培に向けて、側枝2本仕立てによる新たな作型を開発する。キュウリでは、ネット栽培による商品化率向上技術の確立、整枝方法の改善による省力化技術の開発に取り組む。
- 3)メガ団地等の大規模経営体で導入が見込まれる土地利用型野菜(エダマメ、ネギ、露地アスパラガス、キャベツ、ブロッコリー、ダイコン)の生産活動を妨げる雑草の防除体系を確立する。
- 4)また、次の戦略野菜になり得る新品目として、タマネギ、カボチャを取り上げ、タマネギについては秋まきと春まきを組み合わせた新栽培体系の開発、カボチャについては長期出荷栽培体系技術を開発する。

2 課題設定時の背景(問題の所在、市場・ニーズの状況等)

本県では、市場ニーズが高く、本県の気候に適していることから、エダマメ、ネギ、アスパラガス、トマト、キュウリを戦略野菜に位置づけ、"オール秋田"体制で生産振興や販売力強化に取り組んでいる。今後は、メガ団地等の大規模経営体が増加すると考えられるが、小規模でも安定経営が可能な家族経営体は中山間地では重要であり、それぞれの経営体に適した野菜品目の導入が必要である。大規模経営体では、土地利用型野菜を中心として経営展開することになるが、省力的な生産技術や機械化一貫体系、効率的な除草体系の技術を導入することが不可欠である。家族経営体に適するトマト、キュウリ、半促成アスパラガスなどの労働集約型野菜については、省力化・安定栽培技術の確立が必要である。また、オールシーズンの需要があり、次の戦略野菜になり得る品目を新たに掘り起こすことが求められている。

3 課題設定時の最終到達目標

①研究の最終到達目標

- 1)エダマメでは、収穫脱莢作業を高能率化・高精度化できる収穫機を開発する。エダマメの長期連続出荷体系を 策定する。早生エダマメと秋野菜の新栽培体系を開発する。ネギでは連作と生育との関係を解明する。
- 2)アスパラガスでは、ハウスを利用した半促成栽培技術を確立する。トマトでは8月~9月の安定栽培に向けて、側枝2本仕立てによる新たな作型を開発する。キュウリでは、ネット栽培による商品化率向上技術を確立す
- る。整枝方法の改善による省力化技術を開発する。
- 3)土地利用型野菜の雑草の防除については、エダマメ、ネギ、アスパラガス、キャベツ、ブロッコリー、ダイコンの除草体系を確立する。
- 4)次の戦略野菜になり得る新品目としては、タマネギの秋まきと春まきを組み合わせた新栽培体系を開発する。 カボチャの長期出荷のための栽培技術を開発する。

②研究成果の受益対象(対象者数を含む)及び受益者への貢献度

- 1)エダマメ(838ha、897戸、平成30年度JA青果物生産販売計画、以下同様):高性能収穫機の導入、長期出荷体 系の確立により県内の栽培面積と販売額が増加する。ネギ(278ha、470戸):長期的な作付け計画の指針の策定によ り県内の栽培面積と販売額が増加する。
- 2)アスパラガス(208ha、730戸):半促成栽培の確立により1戸当たりの販売額が増加する。トマト(44ha、327戸) 新たな作型の開発により1戸当たりの販売額が増加する。キュウリ(55ha、376戸)商品化率向上技術の確立、省力化 技術の開発により1戸当たりの販売額が増加する。
- 3) エダマメ、ネギ、キャベツ、ブロッコリー、ダイコンの除草体系の確立により県内の栽培面積と販売額の増加が増加する。
- 4)タマネギの安定生産技術の確立、カボチャの長期出荷栽培体系技術の開発により、県内の作付け戸数、栽培面 積、販売額が増加する。

4 全体計画及び財源

別紙のとおり。

5 課題設定時からの市場・ニーズの変化等

「2 課題設定時と同じ」

|6 本県産業や県民生活への向上への貢献の見込み

"オール秋田"体制で生産振興や販売力強化に取り組んでいる戦略野菜を対象に、効率的で先進的な機械開発、安定生産・省力化技術の開発に取り組む。開発された技術は、メガ団地等の大規模経営体から家族経営体まで幅広く貢献できるものである。加えて、オールシーズンの需要があり、次の戦略野菜になり得る新たな品目として要望の強いタマネギとカボチャを取り上げ、市場の優位性を保てる技術を開発する。

これらの課題を解決することにより、本県野菜産業の発展および生産者の所得の向上に十分貢献できる。

7 これまでに得られた成果

- ○エダマメでは、プロトタイプの収穫機をメーカーと共同で開発した。また、早生エダマメとブロッコリーが適合することを明らかにした。
- 〇ネギでは、除草体系に有効な除草剤を選定した。
- 〇キュウリのネット栽培に適する定植期とマルチを明らかにした。
- 〇地域振興局における普及展示圃での取組状況(R元年度)

エダマメ:早生エダマメと秋野菜(2カ所:北秋田地域振興局、秋田地域振興局)

〇地域振興局における普及展示圃での取組状況(R2年度)

エダマメ:エダマメ収穫機(2カ所:北秋田地域振興局、仙北地域振興局)

エダマメ:除草剤(1カ所:仙北地域振興局)

ネギ:雑草の防除体系(3カ所:鹿角地域振興局、山本地域振興局、由利地域振興局)

アスパラガス:半促成栽培(1カ所:由利地域振興局) キュウリ:ネット栽培(1カ所:平鹿地域振興局) タマネギ:栽培体系(1カ所:秋田地域興局)

〇講習会(R元年度)

エダマメ: (1件:宮崎県)

ネギ: (5件: JAこまち、山本地域振興局、JAあきた白神、JA秋田やまもと)

アスパラガス: (2件: 園芸振興課、JA秋田しんせい)

キュウリ: (1件: JA全農秋田) トマト: (1件: JA全農秋田)

タマネギ: (8件: JA大潟村、由利地域振興局)

カボチャ:(1件: JAあきた湖東)

〇実用化できる試験研究成果(R元年度)

タマネギ:(1件:「秋田県版タマネギ春まき無マルチ栽培マニュアルの作成」)

〇東北農業研究発表会での報告(R元年度)

キュウリ:(1件:「夏秋キュウリの防虫ネット被覆栽培における交配用ミツバチの必要性」

8 残る課題・問題点・リスク等

特になし

9 評価

1	O A	_) C O I	D					
=	【内部評価数 ・京浜市場出		口生士 え・	だまめ わき	ぎに加え、重点里	ヹヸであるア゙	ァパラガス	マト きゅう	L]
[・泉浜巾塚口					『米しめも・・	ベハフカハ、コ	` Y ` 、	٦
ズの					设定時に十分に分	分析したものと	と思われる。		Ī
状									Ī
況	 ^ ーーズの増	ナレレもに研究	7日的の音義‡	宣士っている	 C. ニーズの低下と	- レキに研究日的	の音差‡低くなっ	ってきている	
2	A. ——への堷 B. ニーズに大				D. ニーズがほとん				
2	O A	● B ○	C 0 I		<u></u>	, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	() T P 100 JPU	02 5.15	
_L,	【内部評価都		ነ ተ	<u></u> ተቱለው፥	・"井供の田路!	·	™ == + 7 =	ヒェニコ@ノズ	
効 果					カ化技術の開発に 野菜がバランス B				
木	した内容とし	いえる。							
			栽培、きゅ [・]	うりのネット	ト栽培など、農業	削減 はまた きょうりょう はいまた まままた まままた まままた まままた まままた まままた まままた	倹成果が現地で	で取り入れられ ^っ	て
	いるなど効男 ・各品目にお		の技術開発	により、複合	う型生産構造へ <i>0</i>)転換がよりた	□读されること	- が期待される。	
					て検討されており				°
	A. 大きな効果	が助待される			 C. 小さな効果が其	 B往≾れる			
	A. ハこな効果 B. 効果が期待				D. 効果はほとんと				J
3	O A	● B ○	C 0 I		D. 77371	70			
, <u>u</u>	【内部評価教		1 Z :		=1 15-45-11-05-3	4161 A - TI			Ì
進 捗					計画どおりの過 画通りに進んでし				Ì
步 状	- (10 (10-	/매디 Cmr E	本のココックマ	C 03 2 4 1 1	9世ソ1〜たル・・	, Ø ⊂ \m\1×1×	ນ ₀		Ī
況									Ī
	A. 計画以上に	・			 C. 計画より遅れて	 'いる			
	A. 計画のエル B. 計画どおり				D. 計画より大幅に				
4	O A) C O I			,			
	・特になし								
	•								
目 要煙									
要標因達									
要標 因達 の成									
要標 因達 の成 状阻									
要因の状況 別 別 別 に に に に に に に に に に に に に に に に			···		○ 日堙達成を阻	 ミナス栗田があ	Z		
要因の状況 標達成阻害	A. 目標達成を B. 目標達成を								
要因の状況 標達成阻害						<u>害する要因が大</u>	いにある		
要因の状況 標達成阻害	B. 目標達成を	阻害する要因	が少しある		D. 目標達成を阻害	害する要因が大 判5	いにある E基準		
要因の状況 標達成阻害	B. 目標達成を 〇 A 当初	祖害する要因だ の計画より大	<u>が少しある</u> きな成果が	期待できる	D. 目標達成を阻置 A 各評価項目	<u> </u>	いにある E基準 である課題	2つ以上の課題	
要因の状況	B. 目標達成を ○ A 当初	阻害する要因	<u>が少しある</u> きな成果が	期待できる	D. 目標達成を阻認 A 各評価項目 B+ (A評価を関係)	書する要因が大 判別 目が全てA評価で 目がB評価以上 ⁻ よく)	<u>いにある</u> E基準 である課題 であり、A評価が	2つ以上の課題	
要因の状況	B. 目標達成を ○ A 当初 ○ B+ 当初	祖害する要因だ の計画より大	<u>が少しある</u> きな成果が 果が期待で	期待できる きる	D. 目標達成を阻認 A 各評価項目 B+ 各評価項目 A 各評価項目 B+ 会評価項目 A 各評価項目	まする要因が大 判別 目が全てA評価で 目がB評価以上で (く) 目がB評価以上で	<u>いにある</u> E基準 である課題 であり、A評価が	2つ以上の課題	
要因の状況	B. 目標達成を ○ A 当初 ○ B+ 当初 ● B 当初	<u>阻害する要因</u> の計画より大 の計画より成: の計画どおり	<u>が少しある</u> きな成果が 果が期待で の成果が期	期待できる きる	D. 目標達成を阻留 A 各評価項目 B+ 各評価項目 (A評価を関 B (A評価、B) にずれかの	書する要因が大明報 を	いにある E基準 である課題 であり、A評価が である課題	2つ以上の課題	
要因の状況 標達成阻害	B. 目標達成を ○ A 当初 ○ B+ 当初 ● B 当初 ○ C さら	<u>阻害する要因</u> の計画より大 の計画より成: の計画どおり なる努力が必	が少しある きな成果が 果が期待で の成果が期 必要である	期待できる きる	D. 目標達成を阻認 A 各評価項目 B+ 各評価項目 (A評価を関 B (A評価、B (A評価、B (Dずれかか)	書する要因が大明報報報報報報報報報報報報報報報報報報報報報報報報報報報報報報報報報報報報	いにある E基準 である課題 であり、A評価が である課題 平価がある課題		
要因の状況 総合評 総合評	B. 目標達成を ○ A 当初 ○ B+ 当初 ● B 当初 ○ C さら	· <u>阻害する要因</u> の計画より大 の計画より成: の計画どおり	が少しある きな成果が 果が期待で の成果が期 必要である	期待できる きる	D. 目標達成を阻留 A 各評価項目 B+ 各評価項目 (A評価をといずれかの (D評価をといずれかの	書する要因が大 判別 目が全てA評価で 目がB評価以上で 会く) 目がB評価以上で 十評価を除く) D評価項目でC記 会く) D評価項目でD記	いにある E基準 である課題 であり、A評価が である課題	要因が改善不	
要因の状況 総合評 総合評	B. 目標達成を ○ A 当初 ○ B+ 当初 ● B 当初 ○ C さら	<u>阻害する要因</u> の計画より大 の計画より成: の計画どおり なる努力が必	が少しある きな成果が 果が期待で の成果が期 必要である	期待できる きる	D. 目標達成を阻留 A 各評価項目 B+ 各評価項目 (A評価をといずれかの (D評価をといずれかの	書する要因が大 判別 目が全てA評価で 目がB評価以上で 会く) 目がB評価以上で 十評価を除く) D評価項目でC記 会く) D評価項目でD記	いにある 主基準 である課題 であり、A評価が である課題 平価がある課題 平価があり、評価	要因が改善不	
要因の状況 総合評 総合評	B. 目標達成を ○ A 当初 ○ B+ 当初 ● B 当初 ○ C さら	<u>阻害する要因</u> の計画より大 の計画より成: の計画どおり なる努力が必	が少しある きな成果が 果が期待で の成果が期 必要である	期待できる きる	D. 目標達成を阻留 A 各評価項目 B+ 各評価項目 (A評価をといずれかの (D評価をといずれかの	書する要因が大 判別 目が全てA評価で 目がB評価以上で 会く) 目がB評価以上で 十評価を除く) D評価項目でC記 会く) D評価項目でD記	いにある 主基準 である課題 であり、A評価が である課題 平価がある課題 平価があり、評価	要因が改善不	
要因の状況 総合評価 評価	B. 目標達成を ○ A 当 初 初 初 初 初 初 初 初 初 初 初 初 初 初 初 初 初 初	阻害する要因が の計画より大の計画とおりが の計画とおりなる努力が必 なる意義は の計画等へ	が少しある きな成果が 果が期待で の成果が期 必要である な低い	期待できる きる 引待できる	D. 目標達成を阻認 A 各評価項目 B+ (A評価項目 B (A評価価 B (A) (D) (D) 可能で、研究 の 可能で、研究 の 可能で、研究 の 可能で、研究 の 可能で、研究 の の の の の の の の の の の の の の の の の の の	書する要因が大 判別 目が全てA評価で 目がB評価以上で 会く) 目がB評価以上で 十評価を除く))評価項目でC記 会く))評価項目でD記 での記述	いにある E基準 である課題 であり、A評価が である課題 平価がある課題 平価がある課題 平価がある課題	要因が改善不	
要因の状況 総合評価 評試標達成阻害 総合評価 価験(B. 目標達成を A B+ 当 当 さ 継 た画 を は概は、 こことは、 ことは、	Mmar a mark a	が少しある きな成果が 果が期待で のみである な低い のることから	期待できる きる 引待できる 。 、次年度以	D. 目標達成を阻認 A 各評価項目 A 各評価項目 A 各評価項目 B+ (A評価項目 B (A評価の B (A) の で いずれのかの 可能で、の 可能で、の 可能で、の 日本 計画に基づ	書する要因が大 判別 目が全てA評価で 目がB評価以上・ 記がB評価以上・ 上評価項目でC記 記評価項目でD記 での記 での記 での記 での記 での記 での記 での記 での記 での記 での	いにある E基準 であり、A評価が である課題 平価がある課題 平価がある課題 平価があり、評価 認められる課題	要因が改善不 野菜の生産現場	
要因の状況 総合評価 評試が標達成阻害 総合評価 価験の	B. 目標達成を A 日標達成を A 日 日標達成を A 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日	M書する要因が の計画より大の の計画というが の計画をおりが、 があるる。 一部である。 ではるようにできる。	<u>が少しある</u> きな期の要が、 の要いに がからない ののでは、 ののでは、 ののでは、 ののでは、 のいでは、 のいでは、 のいでは、 のいでは、 のいでは、 のいでは、 のいでは、 のいでは、 のいには、 の	期待できる きる 引待できる 次年度以 努課題に	D. 目標達成を阻認 A 各評価項目	書する要因が大 判別 目が全てA評価で 目がB評価以上で まぐり 目がB評価項目でCi まぐり ご評価項目でDi での部 でのででで でので でので でので でので でので でので でので で	いにある 主基準 であり、A評価が である課題 平価がある課題 平価があり、決課題 平価があれる課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 であるとは、注意を表する。 はない。 にない。 にない。 には、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これで	要因が改善不 野菜の生産現場	
要因の状況 総合評価 評試が標達成阻害 総合評価 価験の	B. 目標達成を A 日標達成を A 日 日標達成を A 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日	M書する要因が の計画より大の の計画というが の計画をおりが、 があるる。 一部である。 ではるようにできる。	<u>が少しある</u> きな期の要が、 の要いに がからない ののでは、 ののでは、 ののでは、 ののでは、 のいでは、 のいでは、 のいでは、 のいでは、 のいでは、 のいでは、 のいでは、 のいでは、 のいには、 の	期待できる きる 引待できる 次年度以 努課題に	D. 目標達成を阻認 A 各評価項目 A 各評価項目 A 各評価項目 B+ (A評価項目 B (A評価の B (A) の で いずれのかの 可能で、の 可能で、の 可能で、の 日本 計画に基づ	書する要因が大 判別 目が全てA評価で 目がB評価以上で まぐり 目がB評価項目でCi まぐり ご評価項目でDi での部 でのででで でので でので でので でので でので でので でので で	いにある 主基準 であり、A評価が である課題 平価がある課題 平価があり、決課題 平価があれる課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 であるとは、注意を表する。 はない。 にない。 にない。 には、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これで	要因が改善不 野菜の生産現場	
要因の状況 総合評価 評試がのです。 総合評価 にない はいかい かいかい かいかい かいかい かいがい かいがい かいがい かいが	B. 目標達成を	M書する要因が の計画より大の の計画というが の計画をおりが、 があるる。 一部である。 ではるようにできる。	<u>が少しある</u> きな期の要が、 の要いに がからない ののでは、 ののでは、 ののでは、 ののでは、 のいでは、 のいでは、 のいでは、 のいでは、 のいでは、 のいでは、 のいでは、 のいでは、 のいには、 の	期待できる きる う、次年 度に があれば、 そ があれば、	D. 目標達成を阻認 A A 各 A A A A A A A A A A A A A A A A	書する要因が大 判別 目が全てA評価で 目が全でA評価で 目がB評価の以上 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	いにある 主基準 であり、A評価が である課題 平価がある課題 平価があり、決課題 平価があれる課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 である課題 であるとは、注意を表する。 はない。 にない。 にない。 には、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これで	要因が改善不 野菜の生産現場	

(様式10-1)

研究課題中間評価調書 別紙

課題⊐一ド H310303 事業年度 R1 年度 ~ R5 年度

4 全	全体計画及び財源	(全体計画において	回!		一 実績)				
	実施内容	到達目標	12年	R2 年度 4	R3 年度 年	R4 R5 年度 年度		R元年度到達目標	到達状況
		・エダマメ収穫機を開発する					- プロトタイ 共同で開発	プロトタイプの収穫機をメーカーと 共同で開発する	プロトタイプの収穫機をメーカーと共同 で開発した
H ダイ	冬天	・エダマメの長期連続出荷体系を 提示する					= 極早生・年 集する	・早生品種の基礎データを収	極早生・早生品種の基礎データを収集し た
える新		・早生エダマメと秋野菜の新栽培体系を開発する					 秋野菜として: を検討する	、てブロッコリーの適合性	早生エダマメ後のブロッコリーが適合す ることを確認した
		・ネギの連作と生育の関係を解明 する					= 1年目の4 の残渣投入	1年目のネギ生育後に試験区(ネギ の残渣投入の有無)を設定する	1年目のネギ生育後に試験区(ネギの残渣 投入の有無)を設定した
		・アスパラガスの半促成栽培技術 を確立する					= 栽植密度と 生育に及ほ	栽植密度と定植時期が定植1年目の 生育に及ぼす影響を明らかにする	栽植密度が定植 1 年目の生育に及ぼす影 響を明らかにした
H A	メ・ネギ「日本一」を支	・トマトの8月~9月の安定栽培できる新たな作型を開発する					= 8 月中下台 おける栽植 にする	8月中下旬からの収穫となる作型に おける栽植密度と管理方法を明らか にする	栽植密度と着果調整による管理方法を検 討した
える新	える新栽培技術の確立	・キュウリのネット栽培による商 品化率向上技術を確立する。					ネット栽培 の違いが切 にする	ネット栽培における定植期とマルチ の違いが収量に及ぼす影響を明らか にする	早期(5月17日)定植が収量が高く、黒マルチと白黒マルチの収量は同等であることを明らかにした
		・キュウリの整枝方法の改善によ る省力化技術を開発する					= 整枝方法の 及ぼす影響	整枝方法の違いが労働時間、収量に 及ぼす影響を明らかにする	低段側枝を利用した3本仕立て法の収量 を検討した
		ナヤ・					ネギ(1年	ギ(1年目)の除草体系を検討する	ネギの除草体系を確立する上で有効な除 草剤を選定した
년 국 년	士含古乡井紫乡井鱼莆田	・露地アスパラガス					アスパラガス(検討する	ゴス(1年目)の除草体系を	定植 1年目の除草効果を確認した
H N N A A A	1. 5分割 光の 雅中の 5分 原体 多の ない ない ない ない ない ない ない ない ない はい かい かい ない ない はい かい	・エダマメ	-11					I	
1 1 1 1 1	1	・キャベツ						_	
		・ブロッコリー			1		I	Ι	
		・ダイコン					1		
次の戦争を対象	次の戦略野菜になり得る新品目の新栽培技術の開発	・タマネギの秋まきと春まきを組 み合わせた栽培体系の開発					= 	秋まきでの品種、播種期、定植期、 収穫期との関係を明らかにする。基 肥量と越冬率との関係を明らかにす る	秋まきでの品種、播種期、定植期を組み合わせて現在試験を実施している。基肥量を変えた試験を実施し、越冬率に及ぼす影響を確認している
		・カボチャの長期出荷栽培体系技術を開発する					哲制作型にごといい	抑制作型における品種の検討と品種 ごとに貯蔵性を確認する	抑制作型における品種毎の貯蔵性を確認 した
							슈타		
	計画予算額(千円)		2,500	2,500 2	2,500 2,5	2,500 2,500	0 12,500		
	当初予算額(千円)		2,500	2,015					
<u> </u>	一般財源		2,500	2,015					
京 記 記 記	国費								
	そのも								

課題名:野菜の競争力強化を目指した新栽培技術の開発

レフトシスラーボイント

- エダマメ・ネギ「日本一」の達成を支える新栽培技術の開発。
- 土地利用型野菜の雑草の防除体系の確立と、次の戦略野菜になり得る新品目の新栽培技 戦略野菜(アスパラガス、トマト、キュウリ)の安定生産技術の開発。

訓 即

野菜・花き部

令和元~5年度 (5年間) 研究期間

アスパル 3秋田県では、<u>エダマメ、ネギ</u>、 課題化の背景

- ガス、トマト、キュウリを戦略野菜に位 置づけ、"オール秋田"体制で生産振興 や販売力強化に取り組んでいる。
- 今後は、メガ団地等の大規模経営体が増 加すると考えられるが、小規模でも安定 経営が可能な家族経営体は中山間地では 重要であり、<u>それぞれの経営</u>体に適した 野菜品目の導入が必要である。
- 省力的な生産技術や機械化一貫体系、 大規模経営体に適する土地利用型野菜に

効率的な除草体系の技術を導入するこ

- 次の野菜になり得る新たな品目として要 半促成アスパラガスなどの労働集約型野 薬については、省力化・安定栽培技術の 家族経営体に適するトマト、キュウリ、
- 望の強いタマネギとカボチャについては、 市場の優位性を保てる技術開発が求めら

年 光三 名

経営体や家族経営体の安定経営に向けて、 "オール秋田"で取り組んでいる戦略野 菜の競争力強化と、メガ団地等の大規模 高能率な機械開発、安定生産・省力化技 術の開発を行う。

ダマメ・ネギ「日本一」の達成を支える新 白乳類眼 栽培技術の開発

エダマメ・ネギ「日本一」の達成を支える新

令和元年度の成果

(1)プロトタイプ収穫機をメーカーと共同で開

1

収穫脱莢作業を高能率化・高精度化でき

エダマメ収穫機の開発

栽培技術の開発

(2) 極早生・早生品種の基礎データを収集した

(4)1年目の生育後に試験区を設定した

(3)ブロッコリーとの適合を確認した

- エダマメの長期連続出荷栽培体系の検討 $\overline{\mathfrak{S}}$
- (3) 早生エダマメと秋野菜の新栽培体系の開発

 - (4) ネギの連作が生育に及ぼす影響の検討
- 戦略野菜の安定生産技術の確立
- アスパラガスの半促成栽培技術の確立
- トマトの高温期における安定生産技術の確立 ュウリの安定生産・省力化技術の開発 (2)

 - ①ネット栽培による商品化率向上技術の確立
 - ②栽培管理の省力化技術の検討
- 土地利用型野菜の雑草の防除体系の確立 ო

(2)、(3) ネギとアスパラガスの除草体系を検討

した (1年目)

土地利用型野菜の雑草の防除体系の確立

(3)①定植期とマルチの違いを明らかにした

②3本仕立て法の収量を検討した

(1) 栽植密度と1年目の生育明らかにした

戦略野菜の安定生産技術の確立

(2) 栽植密度と着果調整方法を検討した

- (1)エダマメ、(2)ネギ、(3)アスパラガス、
- (4) キャベツ、(5) ブロッコリー、(6) ダイコン
- 次の戦略野菜になり得る新品目の新栽培技 術の開発 4
- (1) タマネギの秋まきと春まきの安定生産技術
 - (2)カボチャの長期出荷栽培体系技術
- (2) 抑制作型と品種毎の貯蔵性を明らかにした

品種、播種・定植期の組み合せ試験を実施中

術の開発

次の戦略野菜になり得る新品目の新栽培技

- ※普及展示圃での取り組み (R 元年度、

実用化できる研究成果(R元年度、1件)

講習会等での報告 (R元年度、19回)

東北農業研究発表会 (R元年度、1件)

栽培面積と販売額が増加 規模拡大が進み、



1戸当たり面積(a)

面積(ha)

農家戸数

100

700

900

1,02

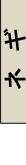
1,000

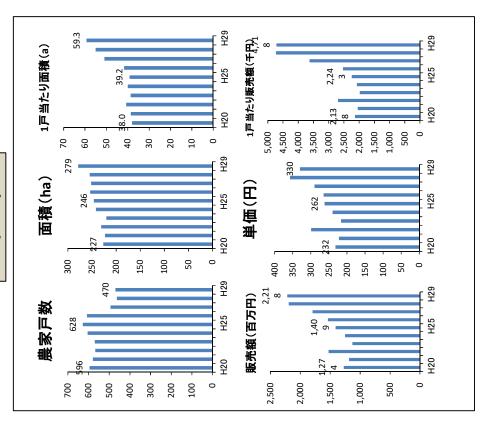
70 60 50 40 20

> 500 400 300 200 100

> > 200

9





H29

H25

H29

H25

H20

H29

H20

1戸当たり販売額(千円)

年(日)

販売額(百万円)

700

1,24

1,400

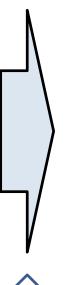
1,400

1,200

500 400 300

942

土地利用型野菜



H25

H20

H29

H25

H20

H25

H20

200

400

200

400 200

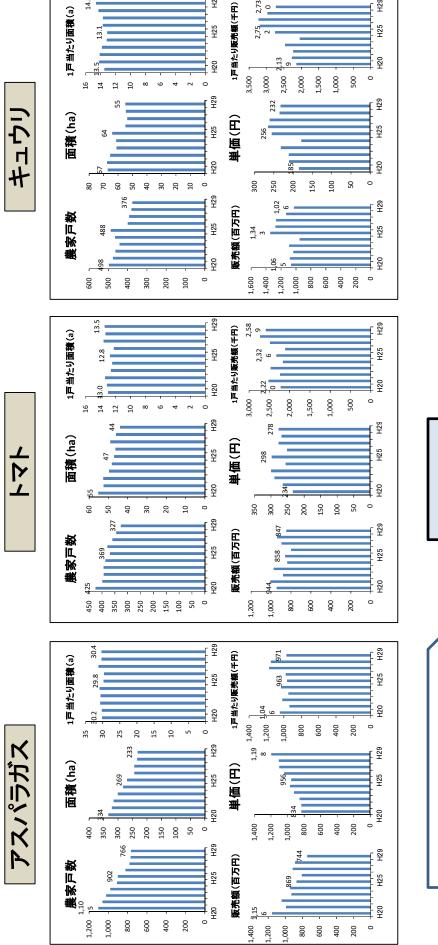
800

100

800

機械開発・作期拡大・安定生産技術の検討 メガ団地等の大規模経営体を想定した、

規模拡大はみられないが単価が安定



H29

労働集約型野菜



中山間地でも安定経営が可能な家族経営体を想定した、省力化・安定栽培技術の開発